

追悼

湯浅泰雄
(一九二五年～二〇〇五年)

渡邊 学

WATANABE Manabu

湯浅泰雄教授は2005年11月7日に80歳で亡くなった。湯浅先生は、20年来、私の指導教授であった。先生は、私が大学院生としてお世話になっていた頃にはとても恥ずかしがり屋で、初対面の人々に対してはあまり胸襟を開くことができなかった。しかし、柔和であるとともに謙虚であり、周りの人々に親切であった。先生は、自分が現在、書いている論文について友人や学生に話をして反応を聞くのが好きであった。

いろいろな国々の来客が先生を訪ねた。今は亡きジョセフ・キタガワ、ながともしげのり、トマス・カスリス、ウィリアム・ラフルーア、グレアム・パークスなどがそれらの来客に含まれていた。私が若い頃は先生の運転手として、これらの来客を筑波山や近くの神社仏閣などにお連れしたのを覚えている。

私は高校時代から東西の伝統の比較に興味を持っていた。それというのも、私はイエズス会が経営している鎌倉の栄光学園で学んだが、イギリス、アメリカ、スペイン、ドイツなど、さまざまな国々から来たイエズス会士から教育を受けたことが東西文化の差異に対する関心を引き起こしたからだった。私は高校時代に西田幾多郎の『善の研究』を読んだり、ヨーガの独習をしたりした。それから、私は、ユングの研究に光明を見だし、当初、無批判に読んでいた。私は、このような状況の中で湯浅先生の著書を見いだしたのだった。先生は、比較文化的な視点を含む『ユングとキリスト教』、東洋の伝統における修行を扱った『身体』を書いていた。私は学部の学生の時に先生に会おうと思ったのだが、上智大学の恩師、アンセルモ・マタイス教授(現・聖母短期大学学長)がたまたま湯浅先生の旧友であり、紹介して下さることになった。

私は、マタイス教授に連れられて茨城大学で開催された日本倫理学会大会に参加した。当時、私は上智大学文学部哲学科の学生であり、湯浅先生は大阪大学教授であった。その後、湯浅先生は、インドネシア大学客員教授を経て筑波大学に赴任した。私が湯浅教授の指導院生になるのにはまだ数年の月日を要した。

私は1983年に筑波大学大学院博士課程哲学・思想研究科倫理学専攻（現・人文社会科学研究所哲学・思想専攻倫理学分野）3年次に編入した。当時、湯浅教授は、翌年開催予定の日仏シンポジウム「科学・技術と精神世界」の実行委員長としてその準備に奔走していた。私も陰ながら手伝わせていただいたのを覚えている。翌1984年、私は南山宗教文化研究所の要請を受けて同研究所に半年間国内留学したが、日仏シンポジウムの事務局を手伝うために筑波に1週間あまり滞在した。ルネ・トム、フランシスコ・ヴァレラなど、一流の研究者が一堂に会するとともに、青木宏之氏の新体道や甲野善紀氏の真剣による実演などもあり、大きな盛り上がりを見せた。

さらに、翌1985年、1年間に渡って私はシカゴ大学大学院で宗教学を専攻した。このように、私は筑波大学から離れていたことが多かったにもかかわらず、湯浅教授には親しくご指導いただき、帰国したときには門下生を集めてご自宅で歓迎会を開いてくださったことを忘れることができない。

湯浅教授は、その後も1988年に日中平和二十周年記念シンポジウム「気と人間科学」の実行委員長を務めるなど、学界に広く貢献した。1990年には人体科学会の設立に大きく関わり、会長副会長を歴任した。また、平成3年には日本臨床気功医療研究会（現・気の医学会）の顧問に就任した。さらに、

平成4年には第三回国際気功科学会議大会会長を務めている。

私は、1988年に筑波大学に「C・G・ユングにおける心と体験世界——有意味性への投企と意味世界の現成」と題する学位論文を提出した。その際、湯浅教授は、私の下書き原稿に多数のコメントを書き込むとともに、論文1本分ほどの書簡を送って下さった。それは、私にとってとても厳しい指摘であったので、私も同じように論文1本分ほどの応答を速達で書き送った。さらに、それに対する反論をいただき、私がさらに反論するということを繰り返して、約3週間後、昭和天皇の訃報に接してから数日後、口頭試問当日を迎えたのであった。私が絶望的な思いで面接に臨んだのは言うまでもない。あれだけ厳しく指導されたのだから面接当日にも激しい指摘があるのではないかと思われた。実際、蓋を開けてみると湯浅先生の態度はまったくちがっていた。むしろ、すでに激しいやりとりを終えた後だったので、もう指摘する必要を認めないというものであった。私はこのような教育的な指導を受けて、翌年3月に学位を授与されたのであった。

湯浅教授は生涯、50冊の著作を残し、300本の論文を残した。1999年に白亜書房から『湯浅泰雄全集』が刊行されはじめ、私もありがたいことに編集委員の一人に指名された。しかしながら、全集を刊行している出版社にとってもっとも頭の痛い問題は、湯浅教授が生涯現役の研究者であったことではなかろうか。亡くなる前年の2004年には『哲学の誕生——男性性と女性性の心理学——』（人文書院）と題する大著を刊行している。本書の著作権が切れて全集に収められるのにはかなりの年月を要するだろう。

昨年、湯浅教授は、友人や弟子たちに囲

まれて80歳の誕生日を祝った。そして、今年の誕生日には、ロンドン大学東洋アフリカ学院(SOAS)日本宗教研究センターで開催されたワークショップで基調講演者を務めるはずであった。それが昨年11月に急逝されたのは、まことに残念なことであった。結局、このワークショップでは、ながともしげのり教授(テンブル大学)を基調講演者として、倉澤幸久教授(桜美林大学)と私が先生に代わって発表することになったのであった。しかし、湯浅先生ご本人の出席は何ものにも代えがたいものであった。

湯浅泰雄教授は、1925年6月5日に福岡県に生まれた。大阪を経て、東京に転居した。湯浅教授は、学部においても大学院においても学際的な教育を受けた。1945年に東京大学に入学し、日本史と倫理学と経済学を専攻し、倫理学と経済学の学士号と修士号を取得している。

湯浅教授は、間柄の倫理学を展開した師、和辻哲郎(1889-1960)の影響を深く受けた。和辻は、人と人との間柄が人間の行為の仕方を規定するということを強調した。ある意味で、これは儒教的な観念の影響であるが、しかし、それはまた日本的な仕方における儒教の受容であった。彼の倫理学は共同体の倫理学と呼ばれるが、それは、彼が社会のさまざまなレベルにおける人間存在の倫理を強調したからである。和辻は日本倫理学会の創立者であり初代会長であった。マルティン・ハイデッガーの「世界内存在」の概念に答えて、和辻は、『風土』という著作を残した。これは、人々が生活している気候風土のちがいに基づいてさまざまな民族の民族性を説明するものであった。和辻は、西洋哲学、仏教哲学、日本思想史、倫理学について広範な著作を残した。その著『古寺巡礼』は、何世代にもわたって広く読

まれている。和辻は、現代の日本思想史の重要人物の一人であり、弟子たちのうちで和辻に比肩しうるのは湯浅のみであったと言っても過言ではない。

湯浅教授は、1956年に東京大学文学部倫理学教室助手となった。彼は、宗教と心理学に対する関心を深め、また、ヨーガを実習した。

湯浅教授は、学習院大学、東京大学などで非常勤講師として教えるとともに、山梨大学、大阪大学、筑波大学、桜美林大学の専任として都合32年間教鞭を執った。彼はまた、インドネシア大学(1980年)と北京外国語大学(1987年)の客員教授を務めた。

また、日本学術振興会の委員を務めるとともに、姫路市の和辻哲郎文化賞の選考委員を務めた。

湯浅教授は生涯、日本思想史、哲学、倫理学、深層心理学、身体論という学際的な研究を行った。また、ユング/ヴィルヘルム著『黄金の華の秘密』、ユング著『東洋的瞑想の心理学』などの翻訳書も残している。

第一に、湯浅教授の業績としては、情念や身体や無意識のレベルの視点を導入した新たな日本思想史研究が挙げられる。湯浅教授は、和辻哲郎が打ち立てた合理的秩序を重視する日本倫理思想史を補完する、情念や身体や無意識のような非合理的なレベルを重視した新たな日本思想史を展開した。その中で民衆の宗教体験を組み込んだ支配的心像の変容過程が明らかにされた。そして、修行論という新たな視点に立つことによって、身体論、宗教と修行の関係、東洋と西洋の哲学のパラダイムの基本的な相違の三つが明らかになった。従来、哲学的視点から十分に取り上げられることがなかった空海の哲学や真言密教をはじめ本格的に哲学的に論じた。これらの思想は、日本

思想史において身体の意義をはじめて論じたものとして重要であることを指摘した。そして、近代日本の哲学と実存思想を統一的に理解するための視座を確立した。その中で内村鑑三、波多野精一、三木清、夏目漱石など、近代性と格闘した思想家の相貌が明らかにされた。

第二に、深層心理学の領域における西洋の精神史と東洋の宗教哲学の研究が挙げられる。湯浅教授は、従来、臨床心理学や心理療法に限定されていた C・G・ユングの分析心理学の紹介を超えて、ユングが中心的に研究を行った宗教心理学の問題を踏まえて、ユングの宗教思想を本格的に紹介し、それを日本に導入した。また、深層心理のレベルで東西宗教の比較研究を行い、ユングの宗教思想を土台にしながら、西洋文化の底流に流れる秘教的な伝統が東洋の宗教思想とむしろ近い関係にあることを明らかにした。さらに、神秘主義の意義が深層心理学を通じて明らかになることを明確に提示した。とりわけ、瞑想修行の問題を取り上げ、東西の秘教的伝統における共通のテーマを解明したことが特筆に値する。

第三に、身体論の新たな学際的研究が挙げられる。まず、身体の問題を哲学の問題として論じる基盤を築き、さらに、修行の問題を媒介として宗教心理学的な領域を切

り開いた。そして、西洋の心理学や哲学における身体の問題と東洋における修行と身体の問題を照らし合わせ、比較思想的な考察に新境地を開いた。さらに、著書『身体——東洋的身心論の試み』（1977年刊）は英訳されて *The Body* (1987) として出版され、世界的に大きな関心を集めた。身体や修行の問題を国際的な視野から論じるための基盤を提供した。また、人体科学会を創設し、哲学、倫理学、宗教学に留まらず、深層心理学、精神医学、心身医学、生理学など、さまざまな分野からの貢献が可能であるような、画期的な学際的フォーラムの形成を行った。また、日本とフランス、日本と中国などといった国際的なシンポジウムを主催して、国際的な学術交流に努めた。

このように、湯浅教授は、われわれに研究と教育の領域において多くの業績を残した。また、亡くなる前年まで単著を残すほど精力的な研究活動をしたことが注目に値する。日本思想史、深層心理学、身体論の研究業績は、長きにわたって傑出したものとして注目されることであろう。

なお、湯浅教授は河上正秀筑波大学教授のご尽力により死後叙勲され、日本政府から従四位がおくられたことをここに記しておきたい。